

看護大通信

41



新潟県立看護大学

基礎看護学助教 水澤久恵

私が受診したときの話です。診察が終わり、皮膚に治療薬が塗られるその瞬間、「これは、何の薬ですか？」と医師に尋ねたところ、その返答は「患者さんは、そんなこと聞かなくていいのですよ」というものでした。また、

お任せしない医療

八十歳代の私の祖母がよくこんなことを言っていました。また、

「先生に質問や意見を言う」と、心証が悪くなる。先生にお任せしておけば一番いいのよ」と。これは、パターンリズム（父権主義）、言い換えれば全てを医師にお

任せする「お任せ医療」です。

パターンリズムとは、父親の立場から子どもにとつて最善のことは、すなわち、患者さんの最善の利益を決めることができるのは、患者さんよりむしろ医師であるというもので、昔からこれが

最善の医療の在り方とされてきました。

しかし、最近は患者の自己決定権（自分で選択し決定する）が認められるようになり、先にお話したような関係性が見直されるようになってきました。私たちには、「身体

の責任者」としての自覚が必要です。そして、自分自身の人生において、

何を大切に生きるか「命の主人公」としての堂々たる主体性をもつことが期待されています。

「お任せしない」ということは、私たちにも心がけるべき事柄があります。以前は、今ほど患者側に医療情報を収集する手段がありませんでした。情報が偏在していたため、患者は自分で判断しようがなく、医療側の説明を聞いて承諾せざるを得なかった状況があります。現在でも、自分で情報を集める努力をし、賢くならなければ状況は変わりません。そこで、①病気や健康維持に関する情報を集めて勉強する。②自

分の病歴や病状をしつかり伝える。③説明が理解できるまで、納得がいくまで話し合う。皆さんは、インフォームド・コンセント（説明と同意）という言葉をお聞きになったことはありますか？これを定める法として、医療法（医療関係者の責務）があり、そこには「適切な説明を行い、医療を受ける者の理解を得るよう努めなければならない」とあります。医療者は患者さんとの対話を大切にし、わかりやすい説明をして真の同意が得られるよう努力をしているはずですが、④日ごろから人生について考える。自分の価値観を大切にすること。これらを心がけ、自分自身の幸福のため、積極的に医療に参加されることを期待します。